

平成20年度 愛鳥週間ポスターコンクール審査講評

【中学・高校の部】

愛鳥週間ポスターは、完成度の高い作品が集まってくるコンクールなので、今年はどんな素晴らしい作品と巡り会えるかをとても楽しみにしながら審査会場へ向かいました。期待以上の力作が多く、ドキドキしながら全ての作品を拝見させていただきました。では、各学年の作品から感じたことを述べたいと思います。

《中学一年生》

彩色技法が多様化しだし、技術的な成長の過渡期にあたる中、平面構成を意識したデザイン的な作品が目立ちました。不透明水彩技法でていねいに描かれたものが多く、鳥の存在感が見事に表現されていました。

《中学二年生》

描き込みのレベルが一段と増しています。透明感のある作品も見られました。また、鳥たちがこういう世界で生きていけるようにといった願いが込められた作風も多く目立ちました。

《中学三年生》

全体的に「愛鳥週間」のレタリング（文字）が大変美しく、細部もていねいに処理されています。また、描かれた鳥の飛ぶ姿に大らかさがあり、見る人の心が鳥の世界に引き込まれていくようでした。

《高校一年生》

四季の移ろいと共に生きる鳥の一生を描いたものや、雛のために大空高く飛びエサをとる姿など、鳥の命を見つめた作品が見られました。

《高校二年生》

画面全体の色調に統一感が感じられます。部分的にアクセントをきかせて絵をまとめており、密度の高い作品が多いです。構図も彩色技法も充分見応えのあるものばかりです。

《高校三年生》

鳥の観察が優れており、いくつかの鳥の仕草なども注意深く見つめられています。作者の鳥に対する愛情が感じられる作品として仕上げられていました。

以上が各学年を見て感じたことです。次年度に向けての改善点をあげますと、コンクールの条件である「国内の野鳥」からはずれた鳥を描いているものが見られました。また、全体的に自分の目で鳥を観察し自然な姿を描くというよりは、図鑑写真やインターネット画像などをもとに構図を決定し、イメージで描かれていると思われる作品も多かったようです。毎年公募するコンクールなので、前年度からバードウォッチングなどに出かけ、スケッチしたり写真を撮ったりしながら、じっくり鳥を観察し描いていってみると、一層素敵な作品ができあがるのかなと感じました。

最後に、一生懸命描いた生徒の皆さんはもとより、ご指導下さいました各校の先生方、励ましをいただきました保護者の皆様にも心より感謝致したいと思います。ありがとうございました。